

マクベスとマクベス夫人

—〈男らしさ〉をめぐる—

朱雀成子

マクベスは劇の当初では、ダンカン王やその家臣から “brave Macbeth” (I. ii. 16)¹⁾ とか “worthy gentleman” (I. ii. 24), 「戦の女神ベローナの花婿」²⁾ (“that Bellona’s bridegroom”) (I. ii. 55) “noble Macbeth” (I. ii. 69), “a peerless kinsman” (I. iv. 58) などと言われ、いわゆる男らしさを持った勇敢で高潔な武人として賞賛されている。しかしながら、マクベス夫人は夫に対するこのような「黄金の評判」“golden opinions” (I. vii. 33) には満足しないで、夫に自分の考える〈男らしさ〉を要求する。夫人の考える〈男らしい〉人間とは、「黄金の評判」などという実質の無いものではなく、チャンスが到来した時には、王を殺してでも「黄金の王冠」 (“the golden round”) (I. v. 28) を得ようとする行動力のある人間のことである。目的のためには手段を選ばず、非人間的なことでもやっつけてのけるという実行力こそ、彼女の言う〈男らしさ〉である。「人情という甘い乳」 (“milk of human kindness”) (I. v. 17) に満ちた夫の性質は、マクベス夫人にとって、はがゆくもどかしい。マクベスは王になりたいという野心を持っていたと考えられるが、その野心の根底には、富や権力への志向もさることながら、妻から男らしくないと思われる自分をもっと〈男らしく〉したいという願望、つまり劣等感を補償しようとする気持が無意識に働いていたのではなかろうか。マクベスは戦場では数々の功績をあげた武将である。しかし家庭内では夫人との関係において、夫人のいう〈男らしさ〉に欠けた弱い存在である。この二人の力関係をみると、劇の当初から三幕のバンクォーの亡霊が出現する所まで、マクベスは夫人の支配下にある。マクベスが王を殺害したのは、夫人の期待にそうべく、夫人の言う〈男らしさ〉を

獲得するためであるとも言えよう。

しかし、この夫婦の力関係は、宴会の場面（三幕四場）を境に変化していく。バンクォーの亡霊が去った後、マクベスは「おれは再び男になった」（“I am a man again.”）（Ⅲ. iv. 107）とつぶやくが、この直後に彼は、夫人も驚くほど素早く抹殺すべき人物を考え実行に移す。夫人は夫のこの〈男らしい〉人間への変身ぶりについて行けず、やがて挫折してしまう。二人の力関係は逆転する。マクベスが〈男らしく〉なってから、我々は夫婦二人の会話を聞くことはないし、あの固い結びつきを見ることはない。悪の世界の住人となったマクベスは、かつては愛したであろう妻の、心の病いに対しても冷淡である。二人の間のあの〈愛〉も失われていくように思える。

本稿では、マクベス夫人のいう〈男らしさ〉とは何か、マクベスがそれをどのように獲得していくか、そしてその結果はどうなるのかを‘man’, ‘manliness’, ‘manly’, ‘manhood’などの男を表現する言葉を手掛りに、‘baby’, ‘woman’, ‘girl’などの対照的な言葉を参考にしつつ考察してみたい。

I

劇の初めて見るマクベスと夫人は、仲の良い夫婦である。マクベスが魔女の予言をいち早く夫人に伝えるべきだと考え、手紙の中で夫人を“my dearest partner of greatness”（I. v. 11）と呼んでいるのをみても分かる。これ以外にも彼は妻を“my dearest love”（I. v. 58）, “dear wife”（Ⅲ. ii. 36）, “dearest chuck”（Ⅲ. ii. 45）と呼び、殺人者の彼にはふさわしからぬ程である。悪事であるとはいえ、夫婦が心一つにして「大きな仕事」（“great business”）（I. v. 68）を遂行しようとする固い結びつきが見られる。

しかしながら、マクベスは夫人から何回も〈男らしさ〉を要求されている。夫人は夫の性質を「気がかりなのはそのご気性、あまりにも人情という甘い乳が多すぎて近道を選べないのでは。」（“Yet do I fear thy nature: /

It is too full o' th' milk of human kindness, / To catch the nearest way.") (I. v. 16-18) と述べているが、'milk of human kindness' を持つことは、夫人によれば性格上の欠点で、男らしくないことにつながる。ダンカン王を殺し、「黄金の王冠」を夫にさん奪させるために、夫人は夫の耳に自分の〈男らしい〉強い心を注ごうとする ("... I may pour my spirits in thine ear.") (I. v. 26) が、そのために彼女はまず地獄の悪魔を呼び出す。

Come, you Spirits

That tend on mortal thoughts, unsex me here,
And fill me, from the crown to the toe, top-full
Of direst cruelty! make thick my blood,
Stop up th' access and passage to remorse ;
'That no compunctious visitings of Nature
Shake my fell purpose, nor keep peace between
Th' effect and it! Come to my woman's breasts,
And take my milk for gall, . . . (I. v. 40-48)

この 'invocation' の場面は、マクベス夫人と悪魔との融合を印象づける。'come to my woman's breasts' や 'take my milk for gall' などの表現は、'unsex me here' の言葉にもかかわらず、悪魔との結合といった性的な感じをもたらす。BBC 制作の『マクベス』の中で、ジェーン・ラポテアの演じるマクベス夫人はこの場面をそのように演じ、ベッドに横たわり、恍惚とした状態でこれらのセリフを述べていた。しかし、ここでマクベス夫人は悪魔になったわけでも、又、第四の魔女になったわけでもない。彼女は魔女たちとマクベスの間にあって、マクベスを悪の世界へ誘い込む、アダムの子のイヴの役割を果たしたのである。

夫人の予想通り、マクベスは王を殺害することをためらう。彼は本来の男としてのあり方を述べる。

I dare do all that may become a man ;
Who dares do more, is none. (I. vii. 46-47)

しかし夫人の雄弁の前には、彼は手も足も出ない。「あの勇気のあったあなたこそ真の男、それ以上のことをやることによってあなたはますます男らしい人間になるのです。」(“When you durst do it, then you were a man; / And, to be more than what you were, you would / Be so much more the man.”) (I. vii. 49-51) と夫人は、マクベスが王を殺すことで〈男らしく〉なると主張する。夫人は更に、例の一旦決心したならば、赤ん坊からでも乳首をもぎとり殺してしまう話をしながら、実行力こそ男の真髄とばかりに夫を焚き付ける。もしマクベスが実行に移さなければ、彼の愛さえも信じてはもらえない (I. vii. 38-39) ほど、彼は弱い立場にある。夫婦の間には子供はいないが、もし夫人が子供を産むならば、男の子だけを産むにふさわしいほど、夫人は〈男らしい〉女性である。

Bring forth men-children only!

For thy undaunted mettle should compose

Nothing but males. (I. vii. 73-75)

結局、夫人の期待に答えるべく、マクベスは暗殺の決意をする。いよいよ悪の世界に入り込もうとする彼は、夫人の影響を受けてか、かつての夫人の ‘appearance and reality’ に関するセリフ³⁾を思わせる言葉を述べている。

Away, and mock the time with fairest show :

False face must hide what the false heart doth know. (I. vii. 82-83)

II

さて二幕のマクベスと夫人の関係は、夫人の方が一方的に強く、ダンカン王殺害の後、恐怖に駆られている夫を励ます。血の付いた短剣を殺害現場へ戻しに行けない夫を見て、夫人は弱気だと非難する。

Infirm of purpose!

Give me the daggers. The sleeping, and the dead,
Are but as pictures; 'tis the eye of childhood
That fears a painted devil. (II. ii. 51-54)

眠っている者も死人も絵姿にすぎないわけで、死んだダンカン王を見て恐しがるのは子供っぽいというわけである。殺害直後の二人の心境は非常に対照的である。マクベスはノックの音に怯え、大海の水をもってしても血を洗い落とせない、むしろその手が大海原を朱に染め、緑を真紅に変えるだろうと、詩的な大げさなセリフを述べるのに対し、夫人はほんの少しの水があれば消えてしまう、と散文的な理性的な言葉で片付ける。恐怖の余り、色々のことを想像していくマクベスに対して、夫人は比較的、想像力に乏しく⁴⁾、感情に左右されない冷静な視点を持っている。〈男らしい〉夫人は、〈男らしさ〉に欠ける夫を支えていかねばならない。

しかしながら、二幕の終わりでマクベスは、「ただちに身支度をととのえましょう。」(“Let's briefly put on manly readiness,")(II. iii. 131)と興味深いことを言う⁵⁾。‘manly readiness’とは夜着を脱いで服に着換えるという表向きの意味の外に、Cleanth Brooks は二つの意味を指摘している。一つは「偽善者の衣服」(‘a hypocrite's garment’)を着る⁶⁾ということ、ダンカン王が暗殺されて悲嘆にくれる忠実な家臣を装うという意味である。もう一つは“the hard and inhuman ‘manly readiness’ of the resolved murderer”⁷⁾ということ、殺人という非人間的なことで即座に実行に移すという、マクベス夫人の言う〈男らしさ〉に通じるものである。事実マクベスは、後半、その〈男らしさ〉を身に付けて次々に残酷な殺害を重ねていく。

III

三幕のマクベスとマクベス夫人はすでに王と王妃である。しかし王冠を手に入れたものの、二人ともバンクォーのことを懸念している。夫人は一

人で居る時に、心中の不安を初めて口にする。

Nought's had, all's spent,
Where our desire is got without content. (Ⅲ. ii. 4-5)

これはマクベス夫人らしからぬ弱気なセリフである。後半、精神に異常をきたす萌芽であろう。もっとも、夫人は夫が登場するや否や、あの鉄の仮面を被って、

Things without all remedy
Should be without regard: what's done is done. (Ⅲ. ii. 11-12)

といつもの口調に戻る。

マクベスの方は少しずつ変化していく。彼はバンクォーへの不安を解消するために刺客を雇い、男ならば暗殺するようにと説得する。かってマクベス夫人が、夫にダンカン王を暗殺させる際にやったように、マクベスは弱虫と呼ばれるのを恐れる刺客達の気持を利用する。即ち、刺客たちにバンクォーを殺すことで男であることを証明させようとする⁸⁾。マクベスは面白いことに、この「恐るべき大事」(“a deed of dreadful note”)(Ⅲ. ii. 44)を妻には語らない。妻の問いに対して「かわいいおまえは知らないでいるがいい、あとではめてもらおう。」(“Be innocent of the knowledge, dearest chuck, / Till thou applaud the deed.”)(Ⅲ. ii. 45-46)と秘密にしている。ダンカン王殺害の時に、夫人にあれ程依存していたのと対照的である。マクベスは〈男らしく〉なるにつれて、夫人から自立していく。それと共に彼の言葉は、夫人のそれと類似性を帯びてくる。

Come, seeling Night,
Scarf up the tender eye of pitiful Day,
And, with thy bloody and invisible hand,
Cancel, and tear to pieces, that great bond
Which keeps me pale! (Ⅲ. ii. 46-50)

これは 'invocation' の場面(一幕五場)のマクベス夫人の言葉に似ており、いよいよマクベスにも悪が乗り移ってきた感がある。かつて夫人は 'invocation' の場で 'raven' や、'night', 'dark' などの言葉を使ったが、マクベスは夫人以上に、'scorpions', 'bat', 'beetle', 'crow', 'night' などの言葉を使い、夫人さえも驚かす。("Thou marvell'st at my words:")(Ⅲ. ii. 54)

彼の言葉

Things bad begun make strong themselves by ill. (Ⅲ. ii. 55)

は、今や夫人以上に悪の深みにはまり込んだ人間の言葉である。

しかし、〈男らしく〉なろうとしている彼にも、多少の振幅はある。バンクォーの亡霊が出現する宴会の場面では、マクベスの精神は非常に動揺し、夫人にそれでも男なのかとなじられる ("Are you a man?")(Ⅲ. iv. 57)。夫人は「そのおおげさなびくつきよりは、ほんとうの恐怖にくらべたらまるで子供だまし、冬の炉ばたでおばあさんの話す怪談でも聞いたときに女の子が見せるものです。」("O! these flaws and starts / (Impostors to true fear), would well become / A woman's story at a winter's fire, / Authoris'd by her grandam.")(Ⅲ. iv. 62-65)と例によって彼の男らしくない点を 'woman', 'grandam' の言葉を使って責める。この亡霊はマクベスだけに見えたあの短剣と同じく、彼の恐怖が生み出した産物であろう。夫人にとっては、夫の恐怖が全く男らしくない馬鹿げたこと "quite unmann'd in folly"(Ⅲ. iv. 72) に写る。しかしマクベスはバンクォーの亡霊だけには我慢ができない⁹⁾。彼は、亡霊さえ出現しなければ、男にやれることなら何でもやれるのである ("What man dare, I dare:")(Ⅲ. iv. 98)。亡霊が去った時、彼は

—being gone,

I am a man again. (Ⅲ. iv. 106-107)

と呟く。この言葉はこの劇の中で重要な‘turning point’になる。というのは、この言葉の後、マクベスは急速に〈男〉になっていき、夫婦の関係もこれを境にマクベスの方が強くなっていくからである。

For mine own good,
 All causes shall give way : I am in blood
 Stepp'd in so far, that, should I wade no more,
 Returning were as tedious as go o'er.
 Strange things I have in head, that will to hand,
 Which must be acted, ere they may be scann'd. (Ⅲ. iv. 134-139)

マクベスがこの言葉を述べた時、彼と夫人は心をつにして共通の敵と闘おうとしているのではない。ここで‘I’という語が何回も使われているのを見れば分かるように、マクベスは自分だけで行動を起そうとしている。彼は自分自身のためには大義も名分も捨てるつもりである。更にここまで来て引き返せない以上、悪の道を進もうという、夫人からの強制ではなく、彼自身による決断をしている。宴会の場面直後の夫婦の会話(Ⅲ. iv. 121-143)二十三行のうち、夫人のセリフはたった三行である。一行はマクベスに時間を告げる言葉、もう一行はマクダフに使いをやったかどうかという単なる問い、そして最後は「あなたに必要なのは、いのちをよみがえらせる眠りです。」(“You lack the season of all natures, sleep.”)(Ⅲ. iv. 140)である。このセリフは王命を無視したマクダフのことを考え、暗殺を即座に実行しようとする〈男らしい〉マクベスに対しての夫人の忠告である。二人の会話はこれまでの夫婦の会話と異っている。これまで夫人は、女々しい夫を叱咤激励ばかりしていたのに、ここで夫人は、マクベスがこれ以上悪の道へ独走していくのを恐れ、むしろ引き止めようとしている。BBC制作の『マクベス』のこの場面では、ジェーン・ラポテアが、心労の余り神経もくたくたになってしまい、まさに崩れ落ちんとする弱々しい夫人を演じていた。一方、ニコル・ウィリアムソンの演じるマクベスは、眠りが必要だという夫人の言葉を受けて、彼女を荒々しく寝室に引きずって行く。

それはこれから悪の道を進んで行こうとする〈男らしい〉力強さを表現していた。この演出は二人の対比といった点からも適切だと思う。この場面は我々が正常な夫人を見る最後である。次に登場する五幕一場では、彼女は夢遊病者となっている。眠りが必要なのはマクベスだけでなく、夫人の方が更に必要としていたと言えよう。しかし、マクベスには夫人の精神状態が把握できていないし、彼女を思いやる余裕もない。彼の頭を占めているのは、自分が悪事にかけてはまだ初心者すぎないという自覚である。

My strange and self-abuse

Is the initiate fear, that wants hard use:

We are yet but young in deed. (III. iv. 141-143)

C. Brooks も指摘するように¹⁰⁾、彼はこの時点ではまだ夫人の言う〈男らしさ〉に完全には到達しておらず、後に見るように非人間化もしていない。

IV

三幕の終りで人々から「暴君」(“tyrant”) (III. vi. 25) 呼ばわりされるほど〈男らしく〉なったマクベスは、魔女たちからも、自分達に仲間入りしたもとして、「悪もの」(“something wicked”) (IV. i. 45) と呼ばれている。マクベスは、apparition 達から予言を聞いて、絶対の安全を約束されたと思うにもかかわらず、不安の念を拭いきれない。というのも、王冠がやはりバンクォーの子孫へ受け継がれることを知ったからである。折しもマクダフの英国への逃亡のニュースに接して、彼は非人間的な破壊的な行動へと駆り立てられる。彼の言葉、

From this moment,

The very firstlings of my heart shall be

The firstlings of my hand. And even now,

To crown my thoughts with acts, be it thought and done:

(IV. i. 146-149)

には、あの初期の優柔不断なマクベスは見られず、考えためらう人から実行の人へと変化した〈男らしい〉マクベスが見受けられる。彼はこの宣言通りに、即座にマクダフの妻子を惨殺する。更に彼の残虐な手は次々と新しい未亡人や孤児をうみだし、スコットランドを「墓地」(“grave”(IV. iii. 166)と化してしまう。ついに彼はマルカムの言う「黒い悪魔マクベス」(“black Macbeth”(IV. iii. 52), 「悪魔の申し子マクベス」 (“devilish Macbeth”(IV. iii. 117)やマクダフの言う「スコットランドの悪魔」 (“this fiend of Scotland”(IV. iii. 233)という非人間的存在となる。

シェイクスピアはこのようなマクベスと対照的に、真の男らしさを具現する人物としてマクダフを出している。マクダフはバンクォーよりも更に正義の人、真に勇気のある人物として描写されている¹¹⁾。彼はスクーンで行われた戴冠式にも出席しなかった (II. iv. 36)。更にマクベスが使者をつかわしたにもかかわらず、マクダフは宴会への出席を拒否し、「無遠慮な広言」(“broad words”(III. vi. 21)を吐いている。彼だけが、ダンカン王の死後、マクベスを王と認めるのを拒否し、しかも父親殺しの容疑をかけられたマルカムこそ無実だと見抜いた人物である。彼はマルカムの許へ走り、「雄々しく」(“like good men”(IV. iii. 3) 祖国を守ろうとする正義の士である。マクダフの真の男らしいイメージは‘man’, ‘manly’などの言葉と共に表現される。

Mal. Dispute it like a man.

Macc. I shall do so;

But I must also feel it as a man :

.....

Mal. This tune goes manly. (IV. iii. 220-235)

V

宴会の場面以来、しばし登場しなかったマクベス夫人が五幕で夢遊病者となって出てくる。「鞍に飛び乗ろうとする野心」(“vaulting ambition”)(I. vii. 27)はあるが、「拍車」(“spur”)(I. vii. 25)を持たなかったマクベスの拍車の役割を演じた夫人は、マクベスが〈男らしく〉なった今、その役割りを失ってしまったのである。夫人のあの“undaunted mettle”(I. vii. 74)は今やマクベスのものである。Ⅲ章でのべたように、マクベスは一旦、悪の道を選択した後は、過去をふり返らず積極的に突き進んできたが、夫人の精神はいつまでもダンカン王暗殺の時点に止まっている。彼女はそこから更に悪の道へ進むことも、かといって善の道へ行くことも叶わず、暗い迷路を彷徨している。迷路の中で彼女は血の染みを気にしたり、臭いを消そうとしたりして、手を何回も洗うという神経症的な強迫観念に取り付かされている。ダンカン王を殺した直接の下手人はマクベスであり、彼女の罪はマクベスのそれと比較すれば軽いはずである。しかし、この精神的な迷路の中で、彼女はすでに地獄を垣間見ている。

Hell is murky. (V. i. 34)

マクベスはこのような精神状態の妻に一度も話しかけることはないし、又、彼女を正気に戻そうとする愛情も持たないようにみえる。彼は二人でやった行為の結果を医師だけに任せている。彼は妻の容体を「ところで病人はどうだな?」(“How does your patient, Doctor?”)(V. iii. 37)と‘my wife’や、かつての‘my dearest love’の代わりに、‘your patient’と言って尋ねる。このセリフにはかって彼が妻に対して抱いたであろう〈愛〉の片鱗も感じられない。彼が妻を見る目は、もはや他人の冷静な目である。

もっともケースネスも言うように、マクベスもこの時点で夫人とは現われ方は異なるが、ある種の狂気の状態である¹²⁾。彼の場合は、夫人のように

心の内に異常をきたすのではなく、外に向かって破壊的な、自暴自棄的な行為をやっていく。彼をそのように駆りたてるのは、‘fear’である。五幕では何回も‘fear’という語が出てくるが、マクベスは予言を思い出して、‘fear’を忘れようとする。それでも‘fear’は家臣の青ざめた顔や言葉を借りて彼を襲う¹³⁾。彼は寄せくる恐怖と闘わねばならない。彼の言葉

I have almost forgot the taste of fears.
 The time has been, my senses would have cool'd
 To hear a night-shriek; and my fell of hair
 Would at a dismal treatise rouse, and stir,
 As life were in't. I have supp'd full with horrors :
 Direness, familiar to my slaughterous thoughts,
 Cannot once start me. (V. v. 9-15)

には、恐怖を味わい尽くした結果、どんな恐怖をも感じなくなった無感覚な人間マクベスが描写されている。劇の冒頭では、イマジネーションに富み、豊富な人間の感情を持っていたマクベスが、数多くの殺人を重ねることで非人間的なマクベスに変貌したのである。このような彼であるから、妻の死のニュースに接しても、悲しみの涙も怒りの感情も湧いてこない。L. C. Kinghts なども指摘するように¹⁴⁾、妻の死は彼にとって無なのである。

マクベスは夫人に鼓舞されて〈男らしさ〉を追求していったが、彼がその〈男らしさ〉に到達した時に、皮肉にも二人は別々の道を歩んでしまった。〈男らしさ〉の追求は、結局、二人の〈愛〉を破壊し、二人を異った形の破滅へと追いやってしまったのである。

註

- 1) 作品からの引用は、kenneth Muir 編のアーデン版による。
- 2) 翻訳の引用は 小田島雄志氏の訳による

- 3) . . . look like th' innocent flower,
But be the serpent under't. (I. v. 65-66)
- 4) cf. A. C. Bradley, *Shakespearean Tragedy* (Macmillan, London, 1965), P.311.
- 5) ダンカン王暗殺のニュースで一同が広間に会した時に、バンクォーが皆に服に
着換えて再び集まり、この大逆罪に対して戦いを挑もうという (II . iii. 124
-130)のに対してマクベスが上記のように答えた。
- 6) Cleanth Brooks, "‘The Naked Babe’ and the Cloak of Manliness," *Macbeth*,
Casebook Series, (Macmillan, 1968), P. 191.
- 7) *Ibid.*, p.191.
He has already laid aside, therefore, one kind of ‘manly readiness’ and has
assumed another : he has garbed himself in a sterner composure than that
which he counsels to his fellows—the hard and inhuman ‘manly readi-
ness’ of the resolved murderer.
- 8) 1 *Mur.* We are men, my Liege.
Macb. Ay, in the catalogue ye go for men;
.
Now, if you have a station in the file,
Not i’ th’ worst rank of manhood, say’t;
And I will put that business in your bosoms, (III . i. 90-103)
- 9) マクベスはもしバンクォーが生き返り、決闘を挑んでくることがあり、もし
その時に自分が震えるようなことがあれば, “the baby of a girl” (III . iv. 105)
とマクベスが最も嫌悪する呼び方で呼ばれてもよいとさえ言う。
- 10) C. Brooks, op. cit., p.196.
Ironically, Macbeth is still echoing the dominant metaphor of Lady
Macbeth’s reproach. He has not yet attained to ‘manhood’; that *must* be the
explanation. He has not yet succeeded in hardening himself into something
inhuman.
- 11) というのは、バンクォーはマクベスが王位に着いた時に “Let your Highness
/Command upon me; to the which my duties /Are with a most indissolu-
ble tie /For ever knit.” (III . i. 15-18) と言って、少なくとも表面上はマクベス
に反抗していない。彼は戴冠式にも出席しているし、宴会にも出席する予定
だったのである。
- 12) *Cath.* Some say he’s mad; others, that lesser hate him,
Do call it valiant fury : (V . ii. 13-14)
- 13) *Macb.* Go, prick thy face, and over-red thy fear,
Thou lily-liver’d boy.
. those linen cheeks of thine

Are counsellors to fear. (V. iii. 14-17)

Mach Hang those that talk of fear. (V. iii. 36)

- 14) L. C. Knights, *Some Shakespearean Themes and An Approach to Hamlet* (Chatto & Windus, 1960), p.119.